

## 1 はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて令和元年度の卒業式は予防対策を十分にとった上で行った式典となり、直後の3月2日から全校生徒が新型コロナウイルス感染症予防のため、休業に入った。3月19日に一旦解除されたものの入学式を終えて始業式の日から再び休業となり、それは5月の末まで続いた。そのため年度当初の学習指導は慣れないオンラインとなり、授業を組み立てながら、家庭学習のしかたを模索することになった。

世間では3月から4月にかけて飲食業の営業自粛や休業、学校の休校による食品ロスのニュースが多くあった。マスクの大量購入や転売、マスク不足もおこり、ごみ収集業の作業者がコロナごみといわれるマスクの多量廃棄に困惑する様子も報道されていた。さらには7月1日からレジ袋の有料化が実施され、私たち消費者はコロナ禍での消費行動を考えざるを得なくなった。

世界に目を向けると生産活動、消費活動の停滞により空気や水がきれいになり、いかに私たちの生活が環境に負荷をかけているかを実感した。これにより人や地球にやさしい消費が一層注目されるようになった。

## 2 ねらい

現在街には2015年9月の国連サミットで採択されたSDGsのカラフルなアイコンがみられ、世間は人や地球にやさしい消費を求めるようになった。またコロナ禍はSDGsを達成するための機会だとも考えられ、行政ではさまざまな取組がなされている。

SDGsのゴール12「つくる責任 つかう責任」は持続可能な消費形態と生産形態を確保することを目的としている。つまり大量生産、大量消費、大量廃棄の時代は過ぎ、限られた資源を大切に使い、環境を維持しながら生活のニーズを満たすことを目指している。そのため生産者には少ない資源でものを生み出す技術や生産過程で生じる廃棄物の抑制が、一方消費者には人や環境にやさしい商品の消費が求められている。

本研究の目標は、消費者として持続可能な社会を目指して主体的に行動する力を養うことである。SDGsのゴール12の達成に向かう第一歩をエシカル消費とし、それを実践できる消費者を育成したい。

## 3 授業計画および取組

本校は普通科のみを設置する進学校で、一学年8クラス編成である。家庭基礎は一年次に2単位履修し、その消費生活分野で「持続可能な社会」について学習をする。しかし生徒はその分野の学習内容を身近なこととしてとらえづらい。そこで食物分野や被服分野の中でも生徒が興味をもちやすい「消費のしかた」を取り扱い、持続可能な社会をめざした「エシカル消費」を学習させることにした。

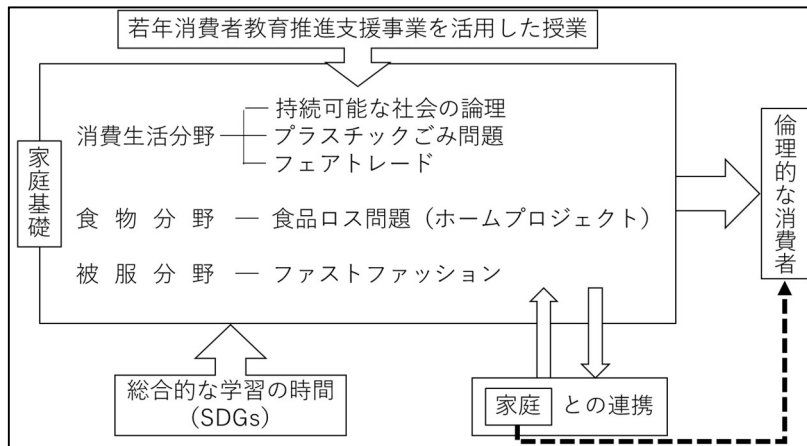
具体的にはホームプロジェクトで食物分野の「食品ロス」、被服分野で「ファストファッション」、消費生活分野で「プラスチックごみ」、「フェアトレード」を取り上げ、それらをとおして「エシカル消費」を学ぶ。学習方法は各家庭の実態調査と、調べ学習をもとに班(1班5人)でまとめて発表をし、講義、DVD学習、実習によって内容の深化を図る。

ホームプロジェクトの「食品ロス」については生徒全員が実態調査・調べ学習・発表に取り組む。他の「ファストファッション」、「プラスチックごみ」、「フェアトレード」については全員が実態調査や調べ学習を行うが、発表においては関心のあるテーマを一つ選択し、同じテーマを選択した生徒同士が班を作り(1班5人)、発表をする。必ず1クラスに「ファストファッション」、「プラスチックごみ」、「フェアトレード」のテーマが発表されるようにした。どの発表もその内容を1班2枚の模造紙にまとめ、5分の発表を行った。授業を発表形式としたのは、

生徒相互のコミュニケーション能力を高めるためである。

また本校では一年次の総合的な学習の時間でSDGsを扱っており、17のゴールの学習をさせている。そのため横断的な学習が期待でき、生徒の深い理解が期待できる。さらに今回は若年消費者教育推進支援事業を活用した授業を実施し、消費生活分野への導入と持続可能な消費の在り方について概要を説明いただいた。

そして年度末には授業を振り返り、各自今後の消費行動を考え家庭への還元を促す。右上に今回の授業の概念図をまとめる。



(1) 若年消費者教育推進支援事業を活用した授業

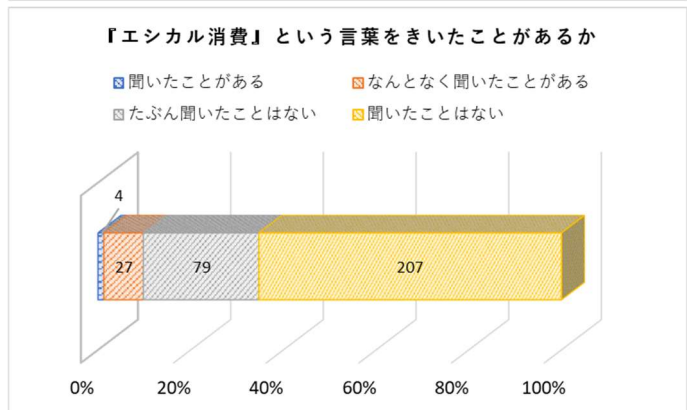
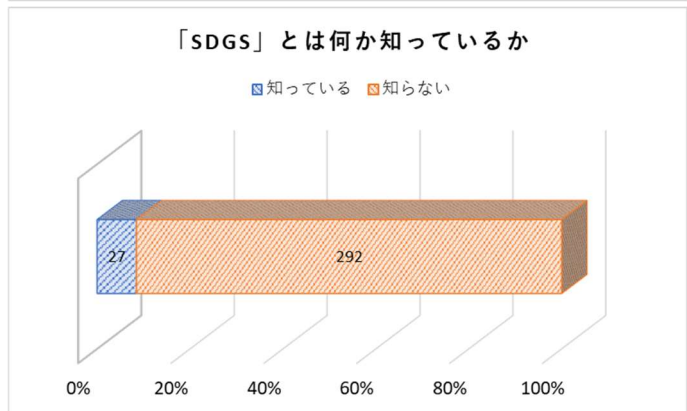
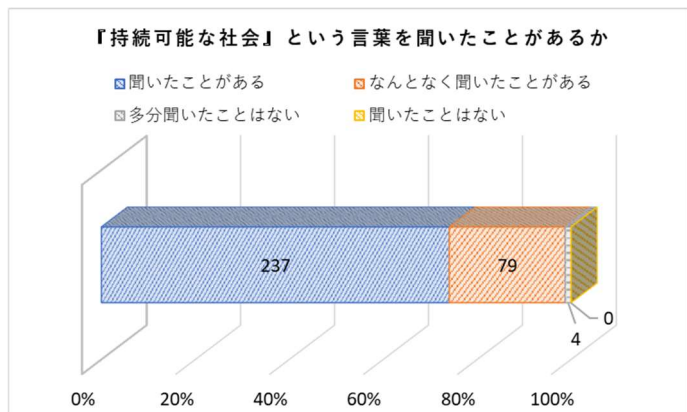
～消費生活分野の導入～

消費生活相談員を講師としてお招きし、消費生活分野の導入授業をしていただいた。本授業の目的は消費生活分野に興味をもたせることである。授業内容は①成年年齢の引き下げ、②契約、③エシカル消費、④消費生活センターに関してで、消費者庁作成教材「社会への扉」、リーフレット、愛知県作成のクリアファイルを使用した講義形式で行われた。それぞれの内容において概略を講義していただいたが、以下には本研究に関係する部分のみを示す。

ア エシカル消費について

生徒に「SDGs」、「エシカル消費」という言葉を聞いたことがあるかを事前に調査した(6月)。右グラフはその結果であり、ほとんどの生徒が知らないことが分かった。しかしながら「持続可能な社会」という言葉は中学の社会で学習してきており、その意味まで理解している生徒も多かった。

この講義では、SDGsが持続可能な社会をつくるための目標であること、SDGsのゴール12「つくる責任 つかう責任」を達成するための方法の一つがエシカル消費である



ことを説明していただいた。

#### イ 消費者市民社会の実現について

エシカル消費を実践するための消費行動の一つに、エシカルな商品を購入することがあげられる。しかし小売店が取り扱っていないこともあり、その場合は消費者が求めることが必要であると説明された。モノを買うという行為は、モノを生産・販売する企業への投票である。そのため多くの消費者がエシカルな商品を求めるようになれば、今以上にエシカルな商品が普及する。このように消費者の行動で社会をより良く変えていくことができる社会を「消費者市民社会」といい、今後このような行動が不可欠であると生徒に伝えられた。

#### ウ まとめ

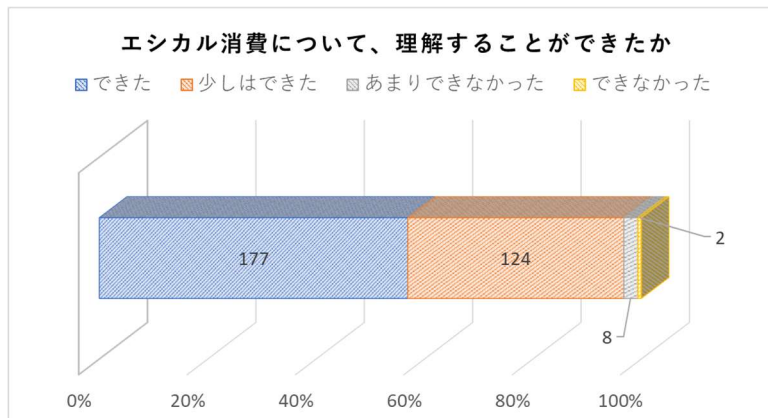
SDGsのゴール12「つくる責任 つかう責任」の説明において、「資源を使ってモノをつかって、みんながそれを使って、使い終わったら捨てる。これでは資源がなくなってしまう。」という言葉が生徒に響いたようだ。今と変わらない生活を続けなければいずれ資源が枯渇し、持続可能ではなくなることに改めて気づくことができ、「つかう責任」の重みを感じたようである。

またゴール12を達成する手段の一つである「エシカル消費」は「商品を売っている人、買う人以外の人もうれしくなる消費のしかた」と説明された。その具体例が、「エシカル消費」を描いた愛知県作成のクリアファイルを教材にして提示された。生徒は初めて「エシカル消費」の意味を知ったわけであるが、その具体的な行動は「食品は必要な量だけ買う」、「マイバックを持参する」などどれも馴染みのあるものばかりであったため、受け入れやすかったようだ。

さらにエシカル消費の一つにはフェアトレード商品の購入がある。これらの商品はネット販売では目にするものの、身近な小売店では取り扱いがないと意見があった。生徒はこの講義を受け、需要がなければ供給されないことを改めて理解し、生産・販売する側に声を届ける大切さを感じていた。つまり消費者市民社会の重要性を知ったようである。



さらにエシカル消費の一つにはフェアトレード商品の購入がある。これらの商品はネット販売では目にするものの、身近な小売店では取り扱いがないと意見があった。生徒はこの講義を受け、需要がなければ供給されないことを改めて理解し、生産・販売する側に声を届ける大切さを感じていた。つまり消費者市民社会の重要性を知ったようである。



#### (2) SDGsについて学ぶ

生徒はSDGsが17のゴールから構成されており、ゴール12が「つくる責任 つかう責任」であると若年消費者教育推進支援事業を活用した授業で学んだ。しかし、SDGsの達成順位や目標別の達成度が発表されていることを知らない。生徒に日本がゴール12をどれだけ達成できているのかを知らせるため、NHK DVD教材「SDGs 今、私たちにできること」を視聴させ、Sustainable Development Report 2020で発表された日本の目標達成度を2017年からの推移とともに示した。生徒は赤・橙・黄・緑に色分けされた日本の達成度、また達成度ランキングが17位と知り、これが日本の現状だとは信じがたい様子であった。日本はもっと良い国だと思っていた、という率直な感想が聞こえてきた。皆、ゴール4「質の高い教育をみんなに」

が緑に色分けされていることには納得していたが、一方ゴール1「貧困をなくそう」、ゴール2「飢餓をゼロに」に対する取組が不十分であることやゴール13から15の環境改善の取組が十分にできていないことに衝撃を受け、またこれから学ぶゴール12の達成度が赤や橙であることに驚いていた。

生徒はゴール12以外にも関心をもったようだが、家庭基礎の授業でSDGsすべての目標を取り扱うことは難しい。本校では総合的な学習の時間でSDGsを題材にするため、他のゴールについてはその授業で担当者に探究学習を進めていただいた。

## ア 発表例

### (ア) 例1 (ゴール10 人や国の不平等をなくそう)

2020年5月25日、アメリカの黒人男性が警察官の不適切な拘束で死亡した事件を取り上げた。人種による差別はされてはならないと説明し、一人ひとりの人間を尊重し、互いに理解しあう社会の構築を訴えた。

### (イ) 例2 (ゴール7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに)

電気の消費量を減らす取組や再生可能エネルギーによる発電についての発表がされた。日本の化石燃料依存度は85.5%である(資源エネルギー庁)。石油や石炭などを燃焼させると地球温暖化の恐れがあるため、再生可能エネルギーからの発電が望ましい。しかし再生可能エネルギーへの転換は莫大な資金が必要となるため一人にはどうすることもできない。しかし、将来枯渇するとされる化石燃料からの発電を減少させ、燃料の枯渇を先延ばしにすることは消費者にもできる。その一歩が節電であると皆に呼び掛けていた。



### (ウ) 生徒作品例



## イ 生徒感想

SDGs達成への道のりが遠いのはまだ「まだ」SDGsの事を知らぬ人が多勢いるからだと  
 思います。この言葉も去年から本格的に取り上げられるようになったので危機感が  
 人々に伝わりつつある「枯木」だと思います。警鐘が鳴りやまなくなる前にまずは  
 自分ができる事を考え模索することから始めようと思います。

## ウ まとめ

SDGs というと世界の目標であり、自分たちの日常には程遠い印象であったが、発表を終えたころには、普段の生活や身近な問題が世界的な問題に発展していると気づくことができた。そのため身の回りの小さな問題を解決することが、大きな問題を解決する糸口になるという考えをもつことができた。また生徒の中には先進国の日本が先頭に立って行動し、発展途上国を助けてあげなくてはならないのではないかという使命感をもった者もいた。この総合的な学習の時間で SDGs のゴールを学習したことにより、一消費者ができる小さな行動つまり「エシカル消費」がゴール 12 を達成するために不可欠であることを理解できたと感じる。

### (3) 食品ロスから知るエシカル消費 (食物分野 ホームプロジェクトで実施)

#### ア 家庭における食品廃棄量の調査

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により外出の自粛が求められ、学校も休業となった。外食産業は開店休業状態となり、また生徒のいない学校では給食の実施はなかった。そのため食材が余剰となり、それを廃棄する様子が多々報道された。その情報を多くの生徒が知りえていると考え、休業中の家庭学習として、家庭の食品廃棄量と廃棄された食品や料理を 1 週間分調査させた。

#### イ 食品ロス削減の工夫

新型コロナウイルス感染症予防による休業が明けた後、班ごとに調査内容を共有させた。食品廃棄が全くない家庭もあれば、毎日食品や料理を廃棄する家庭もあった。廃棄理由は「腐っていた」や「もう食べないから」など様々である。そこで本来食べられるのに捨てられてしまう食品を「食品ロス」といい、それは「もったいない」という日本文化にそぐわないものであると知らせた。家庭での食品ロスを削減するには、①食品が腐らないように保存・保管する、②余った料理はリメイクして消費する、③食品の廃棄部を食材と考え料理をつくる、という方法があると伝え、休業中に家庭で発生した食品ロスを題材とし、それらを削減する料理を考えさせた。夏休みのホームプロジェクトとしてその料理を家族とともに調理し、さらに食品ロスについて詳しく調べることを課題とした。夏休み明けにその成果を班ごとに発表させた。

## ウ 食品ロス削減についての学習発表とまとめ

### (ア) 食品ロスについての調べ学習と発表

生徒は日本の食品ロスの多さが環境負荷や食料不足、経済的損失などの問題を引き起こしていると学び、それを改善しなければならぬと強く感じたようである。実際企業が取り組んでいる食品ロス対策を紹介した班もあれば、各家庭でできる取組を発表してくれた班もあった。中には食品ロス削減を訴えるポスターを作成した生徒もいた。次に生徒がまとめた作品を一つ示す。

## 食品ロスもなそう!

食品ロスとは  
本来は食べられるのに捨てられてしまう食品のこと。

日本では、年間トラック約**1700**台分の食品ロス

食品ロスが引き起こす**問題**

- ごみが多くて処理に多額の**コスト**がかかる
- 将来深刻な**食料不足**が起きるかも

〈食品ロスを減らす取り組み〉

企業 山崎製パン株式会社 家庭

- 作りすぎの抑制 → 受注生産
- 少量包装製品の販売

対策

フードバンクの活用を!

大量の未利用食品を寄付する!

寄付者: 企業・農家 → フードバンク → 受贈者: 福祉施設

〈寄付する際の輸配送費を支援する〉

## 世界の食料事情

年間穀物生産量 **26億トン以上**

アジア・アフリカ等 **約6億9000万人** 慢性的な**栄養不足**

年間廃棄量 **13億トン**

日本 **約612万トン**

国連・WFPが1年で支援する量 **約420万トン**

不安定な収入

〈身近な食品ロス対策〉

- 冷蔵庫の中身を**チェック**し、必要な食品を買う。
- 必要以上の出費で他に何が**できるか**を考える。
- セールでたくさん購入したお肉、野菜は**早めに冷凍**し全食べる。
- 同じ食品が複数ある場合は**古い食品**が使う。
- 食べられる量**を**分け**を作る。

〇**食べ残しのリメイク方法**

- 卵でとじる(揚げ物に有効)例 天丼、かつ丼
- 油で揚げる 例 肉じゃが → コロケ
- 調味量を追加 例 おでん → カレー粉、和風カレー

(4) 食品ロス削減料理

食品ロス削減の料理は家族の協力を必要とし、結果問題意識を共有できる。様々に工夫されたものが発表された。

・ カレーライスコロッケ

余ったカレーライスをコロッケにリメイクした。ポイントはカレーのみでなくカレーライスをコロッケにしたことである。それによりコロッケの丸形を作りやすくなった。これは母親のアイデアだそうだ。



・ 鶏球飯(カイコーハン)

初めて料理に挑戦した男子生徒の作品である。インターネットで唐揚げのリメイク料理を調べ、母と調理した。



・ 打ち込みうどん

祖母が日ごろから作る料理を紹介してくれた。香川のあるうどん屋の看板メニューをまねており、余った豚汁に冷凍うどんを入れて煮込む家庭料理だそうだ。



・ バナナピールキャンディ

食品の廃棄部を使用したエコ料理である。バナナの皮を利用するという珍しい菓子であった。本人はネットで調べて作ってみたが、うまくいかなかったと感想を述べていた。



(ウ) 講義等による補足

発表後、政府インターネットテレビ「もったいない！食品ロスを減らしましょう～大切な食品を捨てない取り組み～」、NHK DVD教材「SDGs 今、私たちにできること」を視聴し、賞味期限と消費期限の正しい理解や現代ならではのアプリを使用した企業の取組、外食での食べ残し対策としてドギーバッグサービスを学んだ。

ドギーバッグは中学の英語の教科書に掲載されていたようで、ほとんどの生徒が知っていた。もともと日本には折詰という文化があったが、衛生面に配慮する企業の考えから次第に姿を消してしまったこと、食品ロス問題で再びドギーバッグと名前を変えて姿を現したこと、そのサービスの復活には消費者に衛生面での「自己責任」が回ることを知らせた。「自己責任」とは持ち帰ったあと、食べられるか食べられないかの判断をすることである。そのため傷んだ食品の状態を視覚や嗅覚、味覚で知ることが大切であると伝えた。

エ 生徒感想

「食品ロス」という言葉は知っていたけれど、実際には具体的な数値を知らず、思っていたよりも深刻な事態なんだなと感じました。  
各班の発表を見て、自分の班だけが悪いわけではなく、みんなが気づいていないことや、気づいていてもなかなか行動できていない人が多いと感じました。  
私も将来は、もっと暮らしを自分でコントロールする機会が増えると思うので、気づいたときに今回学んだことを生かして、ロスを減らすための調理方法を学びたいと思います。

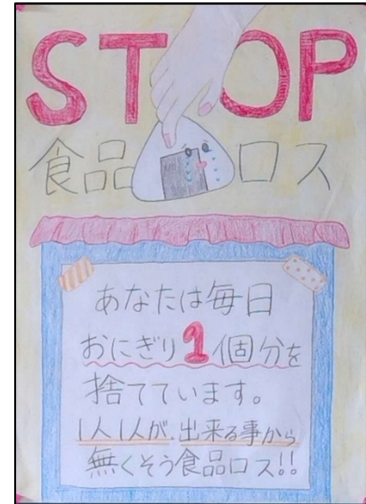
以前の自分のように「食品ロス」という言葉はしてはいるけれど、その意味や現状を知らない人たちがもっと知ってもらって、世界中にいる貧困や飢餓と苦しんでいる人たちに少しでも減らせるように、買い物や食事などで自分たちが持っているものを大切に扱ってほしいと思います。  
また、クリスマスケーキやえほう巻などは特別な日のために大量生産された食品も、安売セールやリサイクル、および保存方法など様々な工夫をして、食品ロス削減を進めていってほしいと思います。  
今も日本に受け継がれてきた「もったいない」という言葉を大切に、日々の積み重ねを一人一人が努力しながら生活してほしいです。

オ まとめ

食品ロス削減料理をつくる課題では「家族と行うこと」を条件にあげた。各家庭に食品ロス削減の意識をもってもらうのが目的である。ある家庭では母のアイデアからうまれた料理に子どもが感心したり、また他の家庭からは料理のレパートリーを広げられたと感想をいただいた。家庭の課題をクリアするホームプロジェクトならではの結果が得られたと感じた。

調べ学習の発表においてはフランスの「食品廃棄禁止法」やスペインの「連帯冷蔵庫」、デンマークの「wefood」など海外の取組を扱ってくれた班もあり、それを聞いた生徒は日本にはない発想に驚いたようである。一方日本の取組としては神戸市の「てまえどり」や企業の「1/3 ルールから 1/2 ルールへ」が紹介され、「賞味期限の長いものを選んで買い、家庭で廃棄までの時間を延ばすことで食品ロスが減る、という考えは間違っていた」、「新

鮮なもの、新しいものを求め過ぎる意識を減らそう」という  
今までの消費行動を改める感想もあり、この授業に意義を感じることができた。また日本における食品ロスの多さには生徒も危機感を覚えたようで、「安いという理由で食品を買う母を止める役割を担いたい」、「スーパーに食品ロス削減のポスターを張るべきだ(右図)」、また内容は不十分であるが「SNS で食品ロスに関することを投稿するとクーポン券獲得」といった現代の若者らしい意見もあり、今後の食における消費生活の改善が期待される。



(4) 家庭から排出されるプラスチックごみより知るエシカル消費 (家庭経済分野で実施)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により世界中でマスクや手袋の需要が増えた。それが河川や海で見つかり、いわゆる「コロナごみ」として問題となっている。また「コロナごみ」でなくとも、近年プラスチックごみの問題が指摘されている。メディアでは令和2年7月1日から有料化されるレジ袋に関する報道がされていたため、生徒にプラスチックごみについて考えさせる良い機会だと感じた。そこで1週間に家庭から排出されるプラスチックごみの量と1週間に使い捨てされるマスクの枚数を調べさせた。またプラスチックごみ問題について調べ学習をさせた。

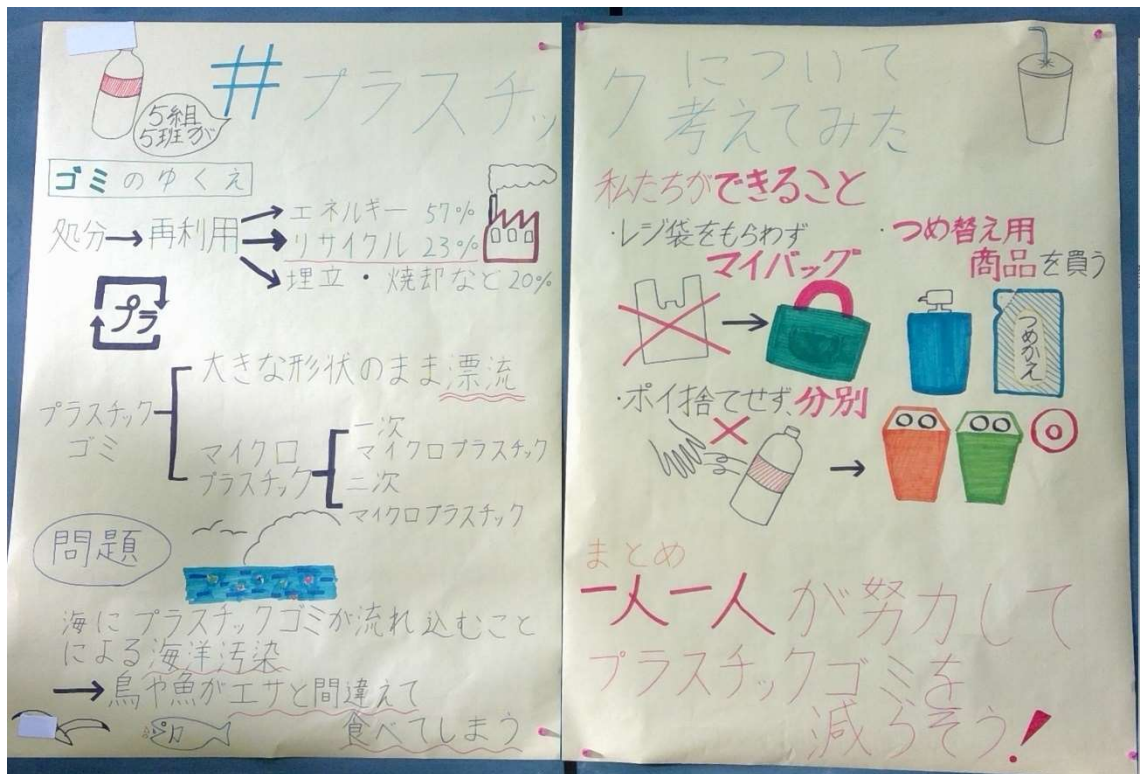
ア 各家庭のプラスチックごみ

新型コロナウイルス感染症予防による休業中、各家庭から排出されるプラスチックごみの内訳と1週間分のプラスチックごみの重量を調査させた。その結果、食品を包装するラップやトレイなどがごみの多くを占め、一世帯当たりのプラスチックごみの排出量は平均約1kgであった。全国の自治体のホームページなどから推測すると、一世帯当たりのプラスチックごみの排出量は400~800g程度である。生徒の家庭と比較するとずいぶん少ないが、①休業中で家族が家にいることが多かったこと、②世帯構成人数の多いことがごみの多さにつながったと生徒は考えた。また一世帯当たりの使い捨てマスクの使用量は1週間で約20枚であった。

イ プラスチックごみについての調べ学習と発表

プラスチックの誤飲・誤食で動物の命が失われていることが発表され、多くの生徒が心を痛めていた。日本の廃プラスチックは世界から見ても多く、このままでは環境に大きな影響をもたらすと説明された。特にマイクロプラスチックを原因とする生態系への負荷をテーマとして取り上げている班が多く、その話題の中で、海洋を漂流しているマイクロプラスチックは食物連鎖によりすでに人体に蓄積され、悪影響を及ぼし始めているのではないかという懸念が示された。次に生徒の発表作品を一つ示す。





発表後、NHK DVD 教材「SDGs 今、私たちにできること」を視聴した。ストローが鼻に刺さり、血を流した亀の映像に目を伏せた生徒が多かった。この DVD では生徒の発表同様、プラスチックの生態への影響や海洋プラスチック問題が取り上げられており、その内容は身に迫るもので大変不安を掻き立てられた。

#### ウ 講義等による補足

発表ではプラスチックの処分方法を取り上げた班もあった。日本ではプラスチックごみの 58%がサーマルリサイクルされ(2017 年プラスチック循環利用協会)、ごみを有効利用していることになっているが、世界においてサーマルリサイクルは「熱回収」であり、「循環」であるはずの「リサイクル」とはみなされていないと発表がされた。講義ではそれに付け加え、パリ協定の「2050 年以降の CO<sub>2</sub>を実質ゼロにする」を受けてサーマルリサイクルは今後国際的に認められなくなっていくと説明した。また日本はプラスチックごみを資源としてアジアに輸出しているが、それらの国が海へプラスチックを流出させており、海洋汚染が進んでいることも伝えた。その事実を受けてバーゼル条約ができ、プラスチックごみの輸出入が制限されたため、日本のごみの行き場がなくなりつつあることを補足した。

また講義では消費者が購入する商品で、プラスチックが使われていないものを考えさせた。必死で考えた結果が「プロッコリー」だけであった。生鮮食品もその他の商品も全てビニールやトレイを使って包装されており、自分たちの生活にプラスチックが深く浸透していると実感した。

しかしながら、生徒から「自分がプラスチックを利用している意識は低く、プラスチックごみを排出しているという実感が無い」という意見が出た。そこで日々のなにげない消費行動からもマイクロプラスチックが排出されている事実を説明した。スクラブの入った洗顔料や歯磨き粉にはマイクロプラスチックが使用されているものがあること、化学繊維もマイクロプラスチックの発生源であることなどを示した。

## エ 生徒感想

自分達で作った物に、自分達が苦しめられているのがなんかなななと思った。やっぱり便利を求めすぎると、その分良くなることもあるので、それとのいいつき合い方をしないといけないと思った。プラスチックは食べたくない。

・1週間ほど5gものプラスチックを体に取り入れてしまっていることにとっても驚いたし、危機感をもっと持たなければいけないかなと思った。プラスチックの製品をまったく使わないという事は難しいと思うので、マイバックを使うや水筒を持参するよと聞いた。自分も今できることをしたいと思った。

江戸時代の日本に「ゴミがな話」を聞いたことがある。もったいないが「今より強く、なんでを回収して使っていたらしい。今の人の「もったいない」が弱まったのは便利を知ってしまったからだと思う。一度自分が経験した「棄」という経験は中々めげなすことか「まな」と今回の授業であらためて思った。

よく母親見か汚れたプラスチックが出ると「洗って捨てなさい」と言われめんどうくさいなと思うことがありましたか、理解ができませんでした。

## オ まとめ

愛知県で取り組まれている「あいちプラスチックごみゼロ宣言」を生徒に紹介した。このチラシを見たことのある者は残念ながら誰もいなかったが、もとより生徒は日本にプラスチック問題があること自体知らなかった。

プラスチック資源循環戦略では2030年までに国内の使い捨てプラスチックの排出を25%抑制するという目標がある。そのため授業ではプラスチックごみを減らす方法を考えさせた。その結果、レジ袋はもらわない、マイボトル持参以外に右のような意見が出た。しかしながらその多くが企業の努力を必要としていることに気づき、プラスチック削減については消費者ができることはないのではないか、という意見も出た。その意見を受け、生徒の中には消費者市民社会の実現が大切であるとの発言がされ、消費者が企業に意見を伝える大切さを改めて学ぶことができた。

- ・ コンビニ弁当の容器を紙製にする。
- ・ 弁当にバラを使わない。
- ・ 食パンのクロージャーは必要ない。
- ・ ポケットティッシュのビニールをなくす。
- ・ マスクの二重包装をなくす。
- ・ 食品の保存にはラップではなく、タッパーを使う。
- ・ ひとり暮らしをしても中食に頼らず、手作りする。

またこの授業では生活に根付いたものの削減は大きな努力を要するとも学んだ。

## (5) 被服が及ぼす環境への影響から知るエシカル消費

(被服分野で実施)

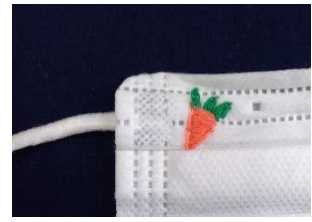
### ア リユースマスク

生徒の多くが使用する使い捨てのマスクはPPやPEといった化学繊維、つまりプラスチックからできている。新型コロナウイルス感染拡大でその需要が増大するとともに廃棄量も増え、いわゆる「コロナごみ」となって世界各地の海や川を汚染した。そして今、海洋に流れ出たマスクがマイクロプラスチックに分解され、環境や生態系に負荷をかけることが懸念されている。

新型コロナウイルス感染症予防による休業中、家庭で使用した使い捨てマスクの廃棄量を調べさせた。すると1週間約20枚が廃棄されていることがわかり、それを1か月分に換算して約80枚が廃棄されていると生徒に知らせた。その事実により生徒は大きな衝撃を受けていた。この使い捨てマスクの大量廃棄に対処する方法としてリユースマスクが有効であると考え、マスクの製作を行った。

(ア) リユースマスクの製作

学校では政府から生徒に布マスクが配布された。社会ではそのマスクの利用率が低いと話題になっていたが、その利用を高めるには自分らしさを出すために刺繍をしたらよいのではないかと、絵を描くのがよいのではないかと女子生徒の意見があった。またすでに不織布マスクにワンポイントの刺繍を入れて使用している(右上写真)生徒も見受けられたので、マスクにワンポイントの刺繍を入れ、マスク製作を行った。できあがった作品を右に示す。



(イ) 生徒の感想

布マスクを普及させる  
マスクはプラスチックが使われているというところを知ってほしい。

、マスク1枚つくるのに少し時間がかかったが、思っていたよりも  
かんたんだった。なので、なるべく人が多くなる場所へ行くときは布マスクにする

(ウ) まとめ

生徒は不織布マスクの原料が「紙」だと思っており、また化学繊維がプラスチックの一つであることも知らなかった。実習をとおして生徒は使い捨てマスクの利用縮小もプラスチックごみの削減につながることを知り、リユースマスクを見直す意識がもてた。現在は布マスクより不織布マスクの方が感染症予防の効果が大きいとされているが、場による使い分けを行い、使い捨てマスクの利用縮小を期待したい。

イ ファストファッションとエシカルでサステイナブルなファッション

(ア) 実態把握

各自が好む着装のデザイン画を描かせた(右図)。カジュアルな洋装を描く生徒が多く、そのほとんどがファストファッションで構成されている。衣服の購入時にはデザインと値段を重視しており、その条件を満たすのがファストファッションだという。しかし自分が所持している衣服がファストファッションだと認識していない生徒も多い。また女子生徒は衣服の所有枚数も多く、数を正確に把握しきれていない現状もあった。さらに衣服の所持にあたって気を配っていることを訊ねると、女子生徒は「着回しができる」こと、男子生徒は「汚さない」ことが多くを占めた。この授業ではファストファッションをはじめにアパレル産業について学習をさせ、今後の衣生活を考えさせたい。



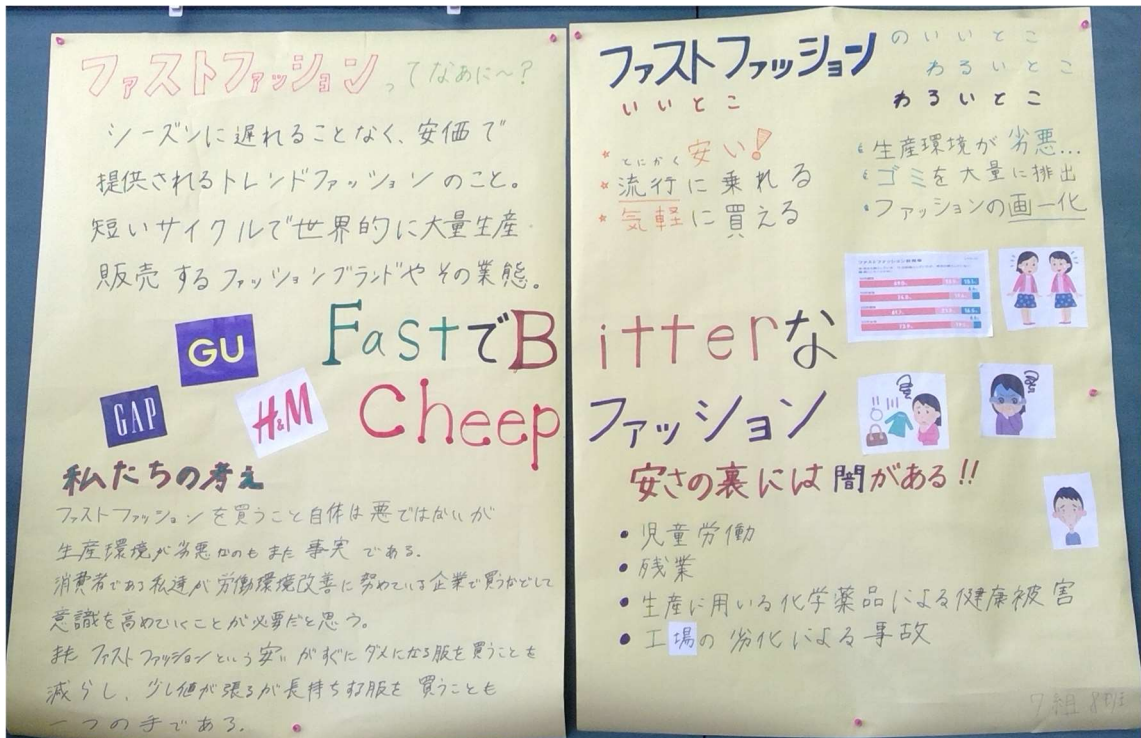
白と白のボーダー柄のシャツ

白のシンプルなお洋服

紺のGパンや綿パン

白のシンプルなスニーカー

- (イ) ファストファッションをはじめとするアパレル産業の実態についての発表とまとめ  
 多くの班がラナ・プラザ崩落事故を話題としてとりあげていた。事故当時生徒らは小学生であったにもかかわらず、ビル崩壊の映像を見て衝撃を受けたという。次に発表作品の一つを示し、生徒の発表をまとめる。

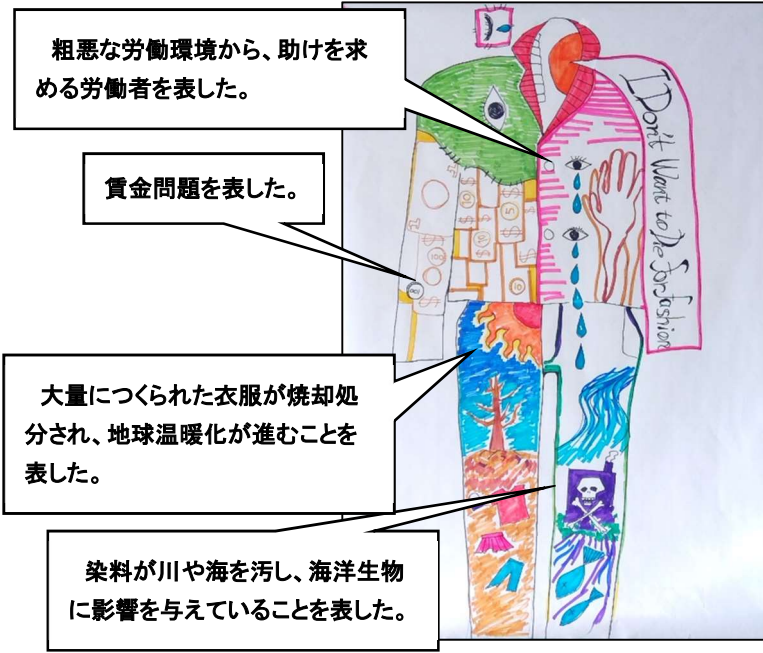


・ ファストファッションのメリットとデメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安い</li> <li>・ 気軽に購入できる</li> <li>・ 流行を追った商品の回転が速い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安価なため安易に購入と廃棄を繰り返す</li> <li>・ 生産者への負担が大きい (賃金・労働時間・労働環境・児童労働・健康被害)</li> </ul>

・ 今後の衣生活における課題

- ・ 一つの衣服を長く着用できるようにメンディングする技術を養う。
- ・ リサイクルショップ、フリーマーケット・SNS をとおして衣服の再利用を心がける。
- ・ 衣服を買うときに本当に必要かを考える。
- ・ オーガニックコットンなど環境にやさしい製品を買う。
- ・ 高くてもその衣服の価値に見合った値段をつけている製品を買う。



粗悪な労働環境から、助けを求める労働者を表した。

賃金問題を表した。

大量につくられた衣服が焼却処分され、地球温暖化が進むことを表した。

染料が川や海を汚し、海洋生物に影響を与えていることを表した。

生徒の中にはアパレル産業において「エシカル」とは程遠い実態を表現した者がいた(左図)。賃金問題、大量廃棄問題、労働環境問題、環境破壊問題を衣服のデザインにまとめ、「I don't want to die for fashion.」の叫びを記している。この男子生徒の作品は皆に大きなインパクトを与えた。この絵により、自分たちがよく利用するファストファッションは生産者や環境の犠牲の上に成り立っており、また消費者が衣類を廃棄するのも環境負荷が大きいことを実感した。

発表後、綿花農家の農薬による健康被害やトップブランドの売れ残り商品の廃棄、有名スポーツメ

ーカーの児童労働、ラナ・プラザのビル崩壊などの記事を生徒に示した。世界ではこのような非倫理的なことが起きていると知り、大変驚いていた。それとともに自らはそのような事実を一切知らずに商品を手に行っていることに心を痛め、衣服の粗雑な扱いを反省していた。

(ウ) 生徒感想

衣服について、深く考えたことがなかったので、私たちがファッションを楽しんでいる裏に良い部分がたくさんあることに驚きました。正直、今日の授業があったからといって、私は変わらず好きなデザインの価格の安い服を買おうと思います。でも、買う前に少し、何年も着れるかや、素材(天然のものを使っているか)について考えたいと思います。また、この話を家族に話したりして、少しでも多くの人に教えるために、ファストファッションの良い面だけでなく悪い面について知ってもらいます。

自分が自分の着ている服がファストファッションだと知ると、しかもファストファッションは環境にも人にもあまり良いとはいえない状況だと知り、驚きました。私は、着たい服は他の人に与えるダメージ、穴があいたり、色褪せたりすると、捨てる回数も多くて、今日の授業では捨てるという選択を一番最後にしようと思いました。また、エシカルファッションやサステイナブルファッションは今でも少しづつ増えてはいますが、まだ捨てる回数も多く、この二つを比べたら、この二つを買うときによく考えて行動したいと思いました。

授業の最初に、自分の持っている服の数を数えようと、毎朝と毎晩持ち回りが、授業の受け回しをしながら、それが「地球環境問題」に向いていることばかり、買わないからエシカル消費、サステイナブルファッションを意識して選ぶことが「スリ」感じました。また、最近ではタリカリセヒヤリヤ、物に引取(持ち帰り)アサリ、普及しているため、それを上手に活用したいと考えて、その日の暮れしをしたいと思います。

ファストファッションは良いことばかりだと思っていたけれど、ビルがくずれぬニュースや  
裏では厳しい労働をしていることを今知った。ファッショニストは「ビビくソレた。  
衣服を買い時があることを覚悟して

(エ) まとめ

アパレル産業は世界で2番目に環境を汚染する産業(UNCTAD)であり、ジーンズ1本分の綿花栽培には人ひとりが飲む10年分の水が必要である(UNECE)といった事実を生徒は知り、驚いていた。授業の振り返りでは再び衣服の購入時に考えることを訊いた。当初と同じく「デザイン」や「値段」との回答もある中、「長く着ることができるか」、「本当に必要か」、「衝動買いはしない」などの意見も見られ、また衣服の所持にあたって気を付けることを訊ねると、「洗濯機利用時は洗濯ネットを使用して服を傷めない」、「袖を伸ばさないように着る」、「穴が開いたら自分で直す」など衣服を大切に使用するための意見が新たに増えた。生徒の経済面を考えるとフェアトレード商品、オーガニック商品を購入することは難しいがそれは将来の課題とし、今後の衣生活において、衣服を大切にし、長期にわたって着用することを意識づけられたと考える。「この授業を受けてもファストファッションを買うことはやめられないが、食品ロス同様「もったいない」という気持ちをもつようにする」という生徒の素直な意見が印象的であった。

(6) フェアトレードから学ぶエシカル消費 (消費生活分野で実施)

生徒の多くはフェアトレード製品を知っていても、それを意識して購入する機会には恵まれていない。この授業ではフェアトレード商品とそうでない商品を比較して製品の価値を考えるとともに、フェアトレード商品購入の意識を高めたい。

ア フェアトレードについての学習と発表

生活に身近なフェアトレード商品であるコーヒー、チョコレート、バナナ、紅茶のいずれか一つを選択させてレポートを課して発表をさせた。生徒にとっては最後の発表となるため、班の独自性が色濃く出ており、一方通行の発表ではなく発表者と聴衆の双方向のやり取りを交えての発表となり、いつも以上に楽しい授業となった。発表内容には①フェアトレードの仕組みについて、②フェアトレードマークには各種のマークがあること、③フェアトレードの実施により、低賃金に起因する生産者の生活水準の低さや児童労働が改善されること、④日本の企業によるフェアトレードの取組や日本におけるフェアトレードの認知度の低さ、⑤フェアトレード商品の価格の高さなどが取り上げられていた。また発表ではスターバックスコーヒーのコーヒーやピープルツリーのチョコレート、また身近なコンビニエンスストアで販売されているチョコレートなどが紹介された。発表作品の一つを次に示す。

# Chocolate of Fair Trade

フェアトレード(公正取引)とは...

発展途上国の貧困な生活者・労働者の生活改善と自立を支援する国際的な運動のスローガン

## フェアトレード商品と値段

コンビニ 森永 DARS  
 (セブン)キュービックチョコ ミルクチョコレート  
 (ミニストップ)アイスコーヒー DARS  
 (ローソン)板チョコ デザートバー

since 2008  
 1チョコ for 1スマイル  
 あなたが食べるともう一人がうれしい。

## フェアトレードによる児童労働の禁止

子どもが働く → 学校に行けない → 文字の読み書き×  
 ↑ 負のスパイラル ↓  
 人が足りない ← 交渉が得意ない ← 大人になる

## フェアトレードの製品を選ぶのが当たり前になるように

3組 2班

ある班の発表の中で「フェアトレード商品を食べたことがあるか」という問いかけがされた。手を挙げたものは35名中チョコレート2名とコーヒーが1名のたった3名であった。高校生がよく利用するスターバックスコーヒーやコンビニエンスストアにもフェアトレード商品はありますが、目にしたことがない生徒がほとんどであった。そのためコンビニエンスストアに売られているフェアトレードチョコレートを持参し紹介してくれた班もあった。あまりにシンプルなパッケージであったため、「それでは目につかないし、売れないのではないか」、「パッケージをもう少しおしゃれにしたらいいのではないか」、「それだとさらに高額になるのではないか」、「フェアトレードなんだから高額にならないように企業に努力してもらえばよい」など意見が交換された。

発表後、補足の講義を行った。生徒はフェアトレードが実施されることにより生産者に最低賃金が支払われ、生活が向上することはよく学習できていたが、消費者にも利益があることに気づいていなかった。そのためオーガニック栽培が推奨されるフェアトレード商品は、より良い品質・より安全な製品をもたらすので、私たち消費者の健康も守られると説明した。つまり、価格の高さは生産者のためでもあるが、私たち消費者のためにもなることを付け加えた。

また名古屋市がフェアトレードタウンに認定されていることを紹介したが、知っている者はわずかであった。生徒はフェアトレードの認知度の低さを改めて感じ、その認知を広めるための工夫を意見交換した。以下に意見を示す。「商品にQRコードを付けて、生産者の生活を動画で見られるようにする」など高校生らしい意見である。

- ・ 月に一度、フェアトレードデイを設けて商品を販売する。
- ・ 店はフェアトレード商品を目につくところに陳列し、ポップなどを付けて商品の説明をする。
- ・ 商品にQRコードを付けて、生産者の生活を動画で見られるようにし、商品を買う動機づけにする。
- ・ 企業はフェアトレード商品におまけをつける。
- ・ 名古屋市はフェアトレードタウンだということをもっと主張する。駅などにフェアトレードを扱う店のマップやPRのチラシを貼ればよい。

## イ フェアトレードバナナの試食

フェアトレード商品を購入したことがある生徒はどのクラスにも3名程度しかおらず、その大半はチョコレートの購入である。生徒は調べ学習や発表によりフェアトレード商品の値段が高いことは十分理解しているが、「フェアトレードチョコは高い割には格別おいしいわけではない」という印象をもつようである。つまり「格別おいしい」わけでないから、「おいしく」て「手ごろ」な価格のチョコレートを購入する。そのためフェアトレード商品の購入にはなかなかつながらない。この授業ではフェアトレード商品は「生産者や生産者の生活を守る」ために値段が設定されていることとオーガニック栽培により消費者にとって安心・安全な製品であるということを理解させたい。

試食にはバナナを用意した。生徒により身近なチョコレートは個人の好みや企業の生産加工技術に差があるため、フェアトレードとそうでない製品の比較は難しい。そのため、同じ原産国のフェアトレードバナナとそうでないバナナを用意して試食させた。

試食に先立ち、①家庭でよく食べるバナナの値段(1袋4から5本入り)、②そのバナナをよく味わう、という課題を出した。授業ではフェアトレードバナナとそうでないバナナを食べ比べ、家庭のバナナを参考に各自思い思いの値段(1袋分)をつけてもらった。もちろん生徒はどちらがフェアトレードバナナかを知らないし、フェアトレードバナナを食べていることも知らない。結果、フェアトレードバナナに比べフェアトレードでないバナナに価格を高くつけた者、またその逆の者、両者は半々であった。つまり両バナナに大差はないことを示している。さらに仮にバナナが両方ともフェアトレードバナナだとするといくらをつけるのかも考えさせた。

結果、生徒はバナナ1袋に150から250円程度の価格を付けていた。フェアトレード取引だと50~200円程度上乗せした価格を設定していた。生徒に正解を伝えたところ(フェアトレードバナナは258から298円/1袋(4から5本入り)、フェアトレードでないバナナ158から198円/1袋(4から5本入り))、生徒お互いの価格設定に興味を示す一方、フェアトレードバナナの値段の高さに驚きを示していた。そこで、フェアトレードバナナを買いますか、と問いかけをしたところ多くの生徒は「買わない」と答えた。理由は「味に大差がないのに、高いお金は払えない」ということであった。フェアトレードバナナとそうでないバナナの約100円の違いは大きいらしく、1房(10本)100円のバナナを購入するという生徒からは「家計の負担になる」といった意見が出された。そこで実は今回試食したバナナの「フェアトレード」自体の価格は20円で、価格を高めているのはオーガニック栽培であり、それは安全な商品であることの表れで、生産者と消費者の健康が守られていると説明した。すると「高額だ」という意識は消えないながらも、「フェアトレードが20円?そんな安くていいのか?」、「安心なバナナなら」と悩んだ生徒も多く見受けられた。



## ウ 生徒感想

家に帰ると母と妹にフェアトレードを知っているかきいてみたけど「聞いたこともない」と言われた。やはりまたフェアトレードの認知度は低いんだと実感した。

自分で買ったバナナは1袋100円位なのに、このバナナをつけた生産者の労働環境は大丈夫かなと、思いました

名古屋はフェアトレードが全然いらない。今でも名古屋に住んで初めて知ったので、そのわりにはフェアトレードの商品を見かけないのが残念。特にフェアトレードはあまり身近に普及してないんだなと思いました。



実際にフェアトレードのバナナを食べてみて、正直いつも食べているバナナの味と変わらないなと思いました。同じ味で、値段が倍ほどするので日常的にフェアトレード商品を購入するのはやはり難しいことだなと感じました。ただ、食べる前は栽培技術もあまり発展していなくて味も普通のバナナより劣っているのではないかと偏見をもっていたので、今回の機会でも美味しさを知ることができて良かったなと思います。

フェアトレードの製品を置くことで、他の製品はフェアに見えなくなるという話をきいてフェアトレードが「特別」ではなく「普通」「当たり前」になっていくようにしてほしいなと思いました。

## エ まとめ

日本ではフェアトレードの市場規模が小さく、認知度も低い。企業はフェアトレードの商品を取り扱っていると、その他の商品がアンフェアに思われるのではないかという懸念を抱き、その結果なかなかフェアトレード商品が広まらないようである。消費者側も高いものより安いもの、という意識は少なからずあり、消費者の意識改革がフェアトレードを進める一歩になりそうである。

生徒の発表でも「日常的にフェアトレードを取り入れましょう。」とか「全てのものがフェアトレードは無理なので、贈り物などにフェアトレード商品を選びましょう。今年のバレンタインがチャンスです。」などの発表があった。しかしながら生徒はフェアトレードバナナの値段の印象が強く「フェアトレード商品を購入するべきだがやはり高く買えない。」という気持ちはぬぐうことはできなかった。しかしこの授業後生徒がフェアトレード商品に関心を寄せてくれていたことがわかった。例えばフェアトレード商品を購入して学校にもってきてくれたり、家のコーヒーがフェアトレード商品であることを話してくれたり、家庭でフェアトレードバナナとそうでないバナナの食べ比べをしたなど、授業を家庭に持ち帰ってくれていたとわかり、この授業の意義を感じた。

バナナの試食で生徒からは「フェアトレード商品は高価であるが生産者のために購入しようと思う」という意見が多くでると期待していたが、「購入してあげたいけど高い。」という意見が多かった。予想外だったが、上記のように生徒が各家庭に伝えてくれれば少しずつ社会全体の意識が変化していくのではと期待される。生徒が親となったときには自分の子に伝え、その消費行動が常となる。それを期待したい。

## 4 今後の課題とまとめ

一年をとおし、エシカル消費について学んだ。各自の消費行動を振り返り、今後の消費生活について考えさせた。

自分のしている消費の仕方が本当にエシカルなのかを考えて物を買ったり、捨てたりする必要があったと思った。ファストファッションやフェアトレードの話を知ったときは企業や生産体制に問題があると思っていたが、それは自分たち消費者の安く売りたい結果なので消費者の考え方が変われば企業も変わると思った。

今まではレジ袋をムダにもらってしまってたよなと思っていたのですが、授業を受けることにより、袋をもらうことがほとんどなくなりました。また、生徒の間でも、なるべくもらわないという意識が広がったと思います。この前クラスの1人がレジ袋を朝買った人がいたのですが、その人のクラスメイトが「買ったらダメじゃん」と注意しているのを見ました。このような考えがもっと広がれば、SDGsは達成に少しずつ近づいていくと思います。

モノを買うことか「消費」ではなく、モノを買って、使って、処分するまでが本当の「消費」だと分かったのだから、長く使えるモノを、適切な値段で、そのモノの背後にある生産者の事を知ってから買って、大切に、使っていくことが大切だと学んだ。

多くの班が「高校生の私たちにできることは少ない」と発表していたのが、皆を疑問として残っています。私は、そんなことはないと思っているからです。もう高校生、自分で考えお金を支払うことも増えてきています。例えば、コンビニ袋を買ったり、レストランで頼んだご飯が思ったより多くて残したり、こんな日常の小さなことを変えていくことは私たちにできることだし、持続可能な社会をつくる大きな一歩だと思います。

また、企業がどれだけいろいろな取り組みをしたところで、私たち消費者の行動が悪いと「エシカル消費」にはなりません。「エシカル消費」を全ての人がおこなえるようになるには、日本の今の状態を知ってもらうことと、今回「エシカル消費」について学んだ私たちが、フェアトレード商品を買ったり、いらなくなったものは、どうにか3Rできないか考えて行動していくのがよいと思いました。

消費者ができることは小さなことばかりだと思っています。私一人だけでは力では無いので、目の前のこと、自分のことだけでもいいからと取り組む。でも、そんな中でも世界にどう貢献できるかとみんなが協力しあうのが大切だと思いました。

エシカル消費の学習を振り返る際、生徒から「僕たちができることって、ほんとに少ないし、大したことできないんですよ」というつぶやきがあった。一消費者であり、経済的にも地位的にも不利な高校生ができることは確かに少ない。オーガニック商品やフェアトレード商品など、生徒はわずかな小遣いの中からわざわざ選択しようとは思わないし、高校生の呼びかけで大人の消費行動を変えることも難しい。

今回一連の授業の中では、持続可能な社会を目指すという世界の大きなテーマの中で、高校生の消費者という小さな単位が、「エシカル消費」には何があり、何ができるかを模索した。確かに食品ロス削減料理やマイボトルの持参、ファストファッションの利用のしかたを一個人が変えたところで、何も変わらないかもしれない。しかし小さな積み重ねが大きな力になると信じ、自分たちにできることから行動すればよい。総合的な学習の時間において身の回りの小さな問題を解決することが、大きな問題を解決する糸口ではないかと気づいた者が多かったはずである。

また今の高校生は昔と違い、いつでも情報を世界に向けて発信できる。つい先日も高校生があるコンビニエンスストアのプライベートブランドの名称を取り上げ、性的役割分担の固定化につながるのではないかと懸念し、企業に名称変更を求めるオンライン署名活動を始めた。SDGsでいえばゴール5「ジェンダー平等を実現しよう」である。やり方に賛否両論があるとは思いますが、高校生も世間の人々を動かす力を持っているという一例である。

全ての授業が終わった後、アパレル産業の問題を衣服のデザインにした生徒になぜあのようなインパクトのある絵を描いたのか訊ねた。すると「僕たちは教えてもらうまで、こんな問題があるなんて、知らないんですよ。授業をやったから知っているまでで、こういう問題は普通みんな知らないと思うんです。知らなくてエシカル消費をしないのと、知っててエシカル消費

をしないのは、知っててしない方が悪いじゃないですか。人は知っててしないのは罪悪感があると思うんです。罪悪感があれば、いずれエシカル消費につながると思うんです。だから知らせることが大事なんだなと思って、なるべく心に残るような絵を描きました。」と答えてくれた。

生徒は1年、家庭基礎の各分野をとおして「エシカル消費」のしかたについて学んだ。その理解度を図るため、授業後(2月)に授業前(6月)と同じアンケートをとった。その結果を右下グラフに示す。アンケート内容は「エシカル消費」という言葉を聞いたことがあるか、また聞いたことのある者には「エシカル消費」を説明できるかである。授業前は「エシカル消費」という言葉自体を知らなかった生徒ばかりであったが、多くの生徒が「エシカル消費」を説明できるまでになっていた。

しかし、今回生徒が学び得た倫理的な消費行動を、生徒自身が家庭に還元できているかは検証できなかった。例えば「食品ロス」を学ぶ授業では、各家庭の食品廃棄量を調査させたが、1週間分の調査に終わっている。食品ロス削減方法を自ら考えた後にも長期間にわたって食品廃棄量を調査させ、エシカルな消費行動が実生活でいかされているかを生徒自身に確認させることも必要であった。それによってこそ「エシカル消費」をしたという達成感が生まれ、倫理的な消費行動が家庭で習慣づけられると思うからである。それはプラスチックごみの排出量調査についても同じことがいえる。実践の結果をフィードバックさせるサイクルをつくり、それを生徒自ら行動に移せるようにすることが今後の課題である。

「エシカル消費」の授業を終えた後、生徒から、「レジ袋をもらわないという意識が広がり、実際レジ袋を買わないように声を掛け合うようになった」という感想をもらった。エシカル消費が少しずつ日常の生活に溶け込みつつあると感じられ嬉しく思った。エシカルな消費行動を当たり前ででき、エシカル消費の必要性を自ら発信できる人間に一步でも近づくことができたと確信できる結果となった。

